

パメラ・ジェーンズ著
『シェパーズ・ブッシュ——ディケンズ
とのつながり』抄訳（後半）

永 岡 規伊子

抄訳（後半）

ユレーニア・コテッジの居住者たち

1851年3月30日の国勢調査によると、二人の婦人がユレーニア・コテッジの責任者となっている。二人とも未亡人で、33歳のジョージアナ・モーソン（監督）と35歳のジェーン・マッカートニー（家政婦）である。16歳から21歳までの11人の若い女性が名簿に記載され、全員が「無職」となっている。その中には二人の姉妹がいた。エレン・グリーンは17歳で、ディケンズによると、彼女は刑務所に入ったことはなく、クラーケンウェル救貧院から送られてきた。その姉妹のシャーロットは21歳とあるが、後の手紙で、彼女が「自分で13歳だと申し立てる」ようになったと書かれている。¹ 国勢調査ではライム・グローブ通りに添った隣の土地に75歳のエリザベス・スコット夫人という名が登録されているので、彼女がユレーニア・コテッジの所有者だったと考えられる。

1861年の国勢調査には、まだマッカートニー夫人の名前がある。² 彼女は「ホーム」の副監督で、47歳となっているが、国勢調査員が彼女の年齢を2歳間違えたようだ。（あるいは、本人が1851年の国勢調査で実際より若く申告したのだろうか。）その時はマーチモント夫人が責任者で（モーソン夫人は結婚して辞めていた）、家政婦のクララ・バニスターが3人目のスタッフとして名前があがっている。また名簿では10名の収容者がおり、全員が「女中」で、名前の上方に別の人の文字で「更生のため」と書かれている。

1861年の国勢調査に記載されている少女について、ディケンズはコメントを

する必要がなかったが、それ以外の収容者に関してミス・クーツに詳しい手紙を書かざるを得なかったようだ。

マーサ・ゴールドスミスは21歳で、その前の1年間はマグダレンという更生施設に入っていた。彼女は優れた人物証明書と着替えの服と3シリングを持って、行くところもなく退所した。³ ディケンズはマグダレンのやり方が効果的かどうか疑いを持ったに違いない。マーサは「そこに入っていたために明らかに状態が悪くなっていた」からである。

ジュリア・モーレイは夕食の後、密かに抜け出して、壁越しに知り合いの男に伝言を渡すのを常習としていた。

イザベラ・ゴードンは、先にも述べたように、ハナ・マイヤーズと共謀して収容者全員がホームのスタッフに敵対するように仕向けた。彼女の行為はホームを混乱に陥れるものだったため、半クラウンのお金を与えられ、助けを求めることができる慈善施設への行き方を教えられて追放となった。

追放されるということは収容者にとって最悪の事態だったので、イザベラ・ゴードンが出ていく時は、彼女たちだけでなくスタッフも泣いた。しかし他の収容者のために、情けをかけることはできなかった。

イザベラの友達ハナ・マイヤーズは、重罪を犯してミドルセックスの治安判事裁判所に出廷した。彼女は植民地への流刑を懇願したが、トレイシー刑務所での懲役12か月の刑が言い渡された。彼女は1854年1月18日付のミス・クーツ宛ての手紙に再び登場し、「先週、トレイシー刑務所でハナ・マイヤーズが(彼女は再びそこに入っているのですが)、最近ホームで盗みを働いた若い女の隣に腰掛けているのを見かけました」と書かれている。

トレイシー刑務所からユレーニア・コテッジに何人かの若い女が送られている。セシーナ・ボラードはその一人であった。ディケンズによると、彼女は「この町で一番の嘘つきのあばずれで、悪に染まった界限でもあれほど汚れた女はいない」という。セシーナはイザベル・ゴードン事件で、ホームの収容者をスタッフに敵対させようとした時に関わった三人目の人物だった。ディケン

ズはセシーナがホームに留まることはないだろうと確信していた。

イザベラが悲しげにホームを出た次の日の朝8時30分に、モーソン夫人はセシーナについて報告をするためにデヴォンシャー・テラスのディケンズの家に急いだ。その前夜、セシーナがふてぶてしい態度を取ったので、夫人は部屋に居よう彼女に命令し、自分たちの身を守ってもらうために庭師に一晩中家に居てもらったのであった。それを聞いてディケンズは、セシーナ・ボラードが「ちっぽけでずんぐりしていて、背がマッカートニー夫人の腰ほどにしか届かない」女性なのに、と面白がった。彼はモーソン夫人にホームへ戻って、セシーナに身支度をしてすぐに出て行きなさいと指図するように言った。もし自分が到着する前にセシーナが出て行っていなければ、ディケンズは警察を呼んでいただろう。

モーソン夫人がホームに戻ってその伝言をセシーナに告げると、彼女は、「病気の振りをしてみた後、ナイトキャップを部屋の端に、ナイトガウンを反対の端に投げつけ、落ち着き払って身支度をし始めた」が、雨の中を出ていけないと言って抗議した。ホームを出ていく前に、セシーナは「ミス・クーツの住所を知っているから、ここでどんな扱いを受けたかを長々と手紙に書いてやるわ」とモーソン夫人に言った。ディケンズは通りでセシーナに出会って別れを告げたが、その日遅く「ノッティング・ヒルをはつらつとして歩き、時々ショーウィンドウを覗き込んでうきうきしている」彼女とすれ違った。彼は、セシーナがイザベラ・ゴードンと落ち合うつもりだろうと思った。

ディケンズはセシーナについて、「2週間で女子修道院を墮落させてしまうだろう」と言っている。

ジェミマ・ヒスコックは、1850年に、「小さなビール貯蔵庫の扉をナイフでこじ開けて、メアリー・ジョインズという別の収容者と一緒に「泥酔」した（メアリーはジェミマほどひどくではないが）。ジェミマは「聞くに堪えない言葉」を使ったので、弱いビールを飲んだ上に「壁から投げ入れられた強い酒」を飲んだのだろうと考えられた。

ディケンズは、「侵入者を近づかせないために、庭に大きな犬を」飼うように提案した。その頃、「近隣に牛乳配達をする既婚の礼儀正しい男性」が家に隣接する野原を牧場として借りていた。

では、コールドバス・フィールズ刑務所で、ユレーニア・コテッジの開設を待っていた二人の少女はどうなったのだろうか。

一人は待っていなかった。ディケンズは最初からこの少女について疑いの目を向けていた。刑務所のスタッフによると、彼女は「模範囚」で、他の囚人たちよりは教育を受けていた。だが自己弁護の言葉が多く、一緒にいると落ち着かない様子から、ディケンズは彼女が信用できない人物だと確信した。その後、彼が刑務所長に、「もし私たちがしくじることがあるとしたら、きっと彼女だろう」と話したところ、刑務所のスタッフがとても動揺したので、余計なことを言わなければよかったと思った。しかしほどなく「模範囚」は姿を消した—おそらく昔の生活に戻るために。彼女の友達はとても悲しみ、「彼女が行ってしまってからずっと、一日中泣いている」とディケンズは書いている。しかし、その少女はコールドバス・フィールズ刑務所でさらに3週間留まった後、ユレーニア・コテッジに最初に入所した4人のうちの一人となった。彼女には刑務所を出る時に着るようと、衣服が届けられた。すべては過去を断ち切るためであった。

収容者の一人であるルイザ・クーパーによると、フランシス・克蘭ストンは『『物静かな人たち』を仲間はずれにした』という。フランシスは、真面目にやろうと努力している誰に対しても、他の人たちが反感を抱くように仕向けたのである。その当時（1854年）のスタッフであったマッカートニー夫人とマーチモント夫人は、フランシスが「他人をトラブルに巻き込んでおいて自分は無関係—ほんの少しだけ外側にいる—という立場にしておくことにかけてはとてもずる賢かったので、彼女を捕まえることはできない」と感じていた。

ディケンズは、フランシス・克蘭ストンが10日以内に態度を改めなければ、彼女を退所させるように委員会に提案すると言った。これを聞いて、別の

収容者であるエリザ・ウィルキンズは、もしフランシスが出ていくのなら自分も出ていきたいと訴えた—彼女たちは「いつも一緒だった」からである。エリザは「こんなに長くここに居るのは飽きた」と言ったため、ディケンズは、エリザの父親（以前の手紙で、彼女の「不幸な父親」と言及されていた）に手紙を書いて、彼女が次の月曜日にホームを出て行くことになったと知らせるよう、家政婦長に言った。

ディケンズがホームを後にしてから、「クランストンがルイザ・クーパーに対して突然激しく怒り出したため、クーパーは、（殺されるのではないかと恐れて）安全のために自分を閉じ込めてほしいと懇願したので、そのようにした」。フランシス・クランストンはすぐにホームを出たいと言ったが、家政婦長のマーチモント夫人には彼女を行かせるべきかどうかわからなかった。そうしているうちに、フランシスは全員に向かって「いちかばちか出ていってやる」と言ったため、マーチモント夫人は彼女も別の部屋に閉じ込めたのであった。

次の日、マーチモント夫人は助言を求めてディケンズを訪ねた。彼は夫人に、フランシス・クランストンをすぐに追い出すように、そしてエリザ・ウィルキンズの父親に娘を連れに来てほしいと伝えるように言った。（1854年6月18日付の必要諸経費として、エリザ・ウィルキンズの父親に支払った3ポンドの勘定書がある。）

ディケンズは「断固とした態度が本当の親切」であると述べ、フランシスをもっと早く追い出す話し合いがあったようだが、もしそうしていたら「ウィルキンズを救うことができただろう」と言っている。

フランシス・クランストンは、後にホワイトチャペルに住む独身の男の三人の子供を世話していたと伝えられている。彼女は家事をうまくこなしていたが、残念なことに「洗濯がひどく下手だった」という。

幸いにも、失敗よりも成功したケースの方が多かった。フランシスのことで困難なことがあったにもかかわらず、ルイザ・クーパーは訓練をやり遂げた。

彼女は1854年10月20日に移住する前に、ミス・クーツに手紙を書いたが、それは以下の通りである。

イギリスから旅立つにあたって、私の恩人である貴女のご親切に心からお礼を申し上げます。感謝の気持ちを表す言葉が見つかりませんが、お祈りをすればいつも共にいて、決してお見捨てにならない神様の助けを得て、これからの生活の中でその気持ちをお示ししたいと思います。貴女の親切で優しい言葉をよく思い出します。それは、私にとって慰めでありましたし、遠い国でも慰めとなることでしょう。11月10日まで出航の予定はありません。ボイル夫人（この夫人は、ユレーニア・コテッジを出た女性にケープでの仕事を世話し、一緒に渡航した人物であろう）は、出航の一週間前にプリマスへ行きます。敬愛するレディに祝福がありますように。そしてホームの若い人々が貴女の恩恵に値する者であることを証明できすように。彼女たちを心配してくれる人がおられるということは励みになります。最初は貴女が来られるのをどんなに恐れたか、そしてどんなにすぐに貴女を愛し尊敬するようになったかを忘れることはありません。貴女は大変親切に手紙をくださり、良きアドバイスを与えて下さいました。ユレーニア・コテッジのことやそこで過ごした多くの幸せな時間をよく思い出します。私は、貴女のお許しを得て、テナント氏のご親切に対するお礼の手紙を書かせていただきました。ケープに到着しましたら、お便りさせていただきます。貴女に祝福がありますように。貴女様のことをいつも祈っております。

敬具

ルイザ・クーパーは1856年にホームに帰ってきた。ディケンズは、「ルイザ・クーパーが立派な服装をして、健康そうな様子で、マッカートニー夫人と一緒にホームの細長い部屋で座っているのを見るのは大きな喜びでした」と書

いている。「彼女は、わたしへのプレゼントとして、ぞっとするようなダチョウの卵をくれました。表面全体に興味の悪い絵が描かれ、その中でましなのは（王冠をつけた）ヴィクトリア女王が、教会の頂上に立って、英国水夫の歓呼に応えている絵でした」。

ホームへの入所

設立時から、ホームはこれまでにない施設を目指していた。それは若い女性を「品行方正」な道に「導くための」ホームであった。「彼女たちを引きずり回したり、追い立てたり、脅かしたりしてはなりません」。ディケンズは、社会に対する義務を売春婦に説いても何にもならない、と考えていた。「世間が彼女たちを冷たくあしらい、追い払ったのだから、彼女たちが社会の善悪を気にも留めなくなったのは当然の結果で」、プライドと自尊感情は親切にされることで取り戻されるはずだと言っている。

ホームは家族—「無邪気に陽気な家族」—のように小さなグループで運営されるようになっていた。若い女性はその家で家事を学び、自尊心を取り戻すことができれば、社会に自分の居場所を見出すだろう。ディケンズは、「厳格でありながらも、楽しく希望に満ちた訓練の体制が確立されること」が最も重要であると感じていた。それは「秩序、時間厳守、清潔、家事の日常業務」であり、「仕事と禁欲の単調な生活はここでおわりにして、神に祝福された自分の幸せな家庭を持つことを目標としている」ことを、皆が理解しなければならないと強調した。彼はまた、このような人々のために適切な施設付き牧師を選ぶことが重要だと考えていた。「誤った対応をすると、彼女たちはきっと期待を裏切る」ことになるからである。

最初の収容者のうちの一人は自分のベッド—自分だけのベッド！—を見て喜びの声を上げた。相部屋ではあったが、皆それぞれに自分のベッドを持つことができた。

収容者を探すことがディケンズに課せられたもう一つの仕事だった。彼は刑

務所長と長時間話し合い、ユレーニア・コテッジの最初の収容者は全員刑務所から受け入れた。時がたつにつれて、ユレーニア・コテッジはかなり広い範囲から女性を受け入れるようになった。飢えたお針子、貧民学校の貧しい少女、警察署で一時保護された衣食にも事を欠く少女、通りに立つ若い女などである。

ホームの存在を知ってもらうために、彼は刑務所にいる女性に向けて訴える文を書き、配布している。

「墮ちた女に訴える」

この手紙を読み始めて、貴女個人に呼びかけているのではないと思われるでしょう。けれども、幸せになるために生まれてきたのにみじめな暮らしをしてきた人、前途に悲しみしか、あるいは過去に無駄にすごしてきた青春しか見出せない人、かつて母親であったのなら、自分の不幸な子どもに対して誇りではなく恥を感じている人、私はそのような、まだ若い女性たちに呼びかけているのです。

貴女たちはそのような女性たちです。そうでなければ、この手紙が貴女の手が届くことはなかったでしょう。もしあなたが悲惨な生活から抜け出し、友達と静かな家と、自分と他人に役立つ手段と、心の平安と、自尊心と、貴女が失ったすべてを取り戻す機会を求めることがあったなら（そう願ったことがあるにちがひありません）、この手紙をよく読んで、後でよくお考えください。

私は、そのようなすべての善きものを与えてあげられるかもしれないのではなく、**確実に**与えてあげられるのです。もし、それを受けるに値するように、貴女が努力するのであれば。私があなたよりずっと優れていると思ってこのように書いているのでもなければ、あなたの置かれた立場を思い出させて傷つけようと思って書いているのではありません。ただ貴女に親切にしたいだけです、貴女が私の妹のように思って書いているのです。[後略]⁴

この訴えは、将来ユレーニア・コテッジに入る可能性のある女性に向けて、刑務所にいるうちに読むようにと配布された。初期の収容者のうちの何人かは、クラーケンウェルにあるコールドバス・フィールズ刑務所から来た。この刑務所はとりわけ苛酷な状況であったことから、バスチーユ監獄（英語読み：バスティール）に因んで「スティール」と呼ばれていた。その刑務所は、現在ではファリンドン・ストリートとローズベリー・アヴェニューの交差点にあるマウント・プレザント郵便物仕分け所になっている。

コールドバス・フィールズはもともと男女両方が入る刑務所だったが、1850年までに、女性と少年をウェストミンスターにあるトットヒル・フィールズ刑務所に移すことに決まった。そのためコールドバス・フィールズは、有罪判決を受けた成人男性だけを受け入れるようになった。ウェストミンスターの刑務所は女性を600人収容することができ、そのほぼ半分は寄宿舎の造りになっていた。

G.L. チェスタトンがコールドバス・フィールズの刑務所長で、オーガスタス・トレイシー中尉はウェストミンスターにあるトットヒル・フィールズの刑務所長だった。二人は友人で犯罪者の更生に興味を持っていただけでなく、先に述べたように、ユレーニア・コテッジの委員会のメンバーだった。ディケンズがユレーニア・コテッジを見つけた時、チェスタトンは彼と一緒にいて、賃貸の取り決めをするのを手伝った。トレイシーは自分の刑務所から多くの収容者を送っており、両者は最初からその事業に関わっていた。

ユレーニア・コテッジでの生活

少女たちの服装は救貧院のようなお仕着せではなかった。ディケンズはミス・クーツに、デリー（木綿の布）のサンプルの色が「陰気すぎる」として送り返したこともあった。彼はドレスやリネンをトッテナム・コート・ロードにあったシュールブレッッドという店で買っていたが、「適度に明るい感じで、それでいてこざっぱりして控えめな」ドレスを注文している。「ホームで3人が

似たような服装をすることで、同時に4色のドレスがあればいいでしょう。3人一緒か、あるいは家政婦長のホールズワース夫人と一緒に出かける時に、自分たちが目立っていると感ぜないで済みますから」。

少女たちは、学課に加えて家事のやり方も教わったが、洗濯の日は困ったことが起きた。1848年のことだが、洗濯の日はホールズワース夫人とグレーブズ夫人が交互に早起きするようにと委員会が伝えたところ、ホールズワース夫人はディケンズに「グレーブズ夫人は無理です」と答えたのである。ディケンズはうんざりして、そのことは自分でミス・クーツに伝えるようにと言った。グレーブズ夫人は「礼儀正しいが早起きが苦手」なので、あまり頼りにはならなかった。1850年には、ディケンズは「通いで手伝ってくれる女性を雇ってはどうか、そうすれば少女たちも教えてもらえる」と提案している。またパン作りにも問題があった。彼は「オーブンがあるのだから、パンを買わせるわけにはいかない」と言って、ここでも誰かに教えに来てもらってはどうかと助言している。

ホームでは娯楽の時間もあって、「一緒に座って針仕事をしたり、友達へのプレゼントを作ったり、夏には小さな花壇の手入れをしたりした」。昼食後の娯楽の時間に続いて、「慎重に選ばれてはいるが、興味の持てる本」の読書の時間があった。それはすべて、彼女たちに新しい生活、植民地での新たな出発を準備するためであった。そこで、彼女たちは「善良で誠実な男性の妻」となることが期待されていた。ミス・クーツは、彼女たちが救われるのであれば、結婚してもしなくても構わないと思っていた。

ディケンズは説教から選んだ「とてもシンプルで、それ自体で美しい」二つの「聖句」を居間に飾った。また彼自身が書いた二つの文を貼り出さずにはいられなかったようだ。一つは、「秩序正しさ、時間厳守、温和であることの大切さ」についてであり、もう一つが「神に対する私たちの義務と、隣人に対する私たちの義務」についてであった。さらに、寝室にも同様のものが掲げてあり、「互いを思いやり赦し合うことなしに床に就かないように促す」内容で

あった。そして、少女が「到着した時に」家政婦長のホールズワース夫人が一人一人に読んで聞かせるための「短いあいさつの言葉」を書いた。

音楽も教科に入っており、そのレッスンはディケンズの友人で、姉のファニーと王立音楽院で同窓だった作曲家のジョン・フラーが担当した。1848年のフラーの請求書が25ポンドという報告書が残っている。ディケンズは中古のピアノを探しまわり、ついに9ポンドで見つけた。「家族移民のためのローン協会」を設立し、3,000人ほどの貧しい人たちをオーストラリアに移住させたキャロライン・チザムが、少女たちは「ピアノを複数持っている」というのは本当かと、ディケンズに尋ねたという。彼はミス・クーツに宛てて「ええ、それぞれ一台ずつ持っています。グランドピアノが1階にあって、寝室には小型のアップライトのピアノがあって、それに洗濯場に小さなギターがあります、と言えなかったことが、今後ずっと残念に思うことでしょう」と書いている。

報酬

良い行いを奨励するために「評価表」が考案され、点数が良いと報酬としてお金が与えられた。評価は1から4で、4が最高点だった。評価表は、マコナキー大佐の評価システムをディケンズが修正したものだった。

アレクサンダー・マコナキー大佐は、刑務所の改革と規律について多くの著作がある。政府に任命されて、受刑者のウェイマス港での建設作業態度を評価する採点システムを考案した人物である。ユレーニア・コテッジの収容者たちは次のような項目に分けて評価された。

誠実さ

勤勉さ

平静さ

行動や会話の礼儀正しさ

自制心（穏健さと忍耐力を指す）

整理整頓

時間厳守

儉約

清潔さ

「これらの項目それぞれについて、全員が毎日計算して記録した」。得点の平均は週に170点だった。「この平均的な年間収入は、庶民階級の女性使用人が得る1年の賃金とほぼ同じ額だった」。「彼女たちの各々の収入は海外移住するまで取っておかれた。外国に到着して生活を始める資金にするためである」。

病気の場合は、その人が普段平均して得ている点数が与えられた。日々の努力を台無しにし兼ねないので、ディケンズは悪い点数をつけることに慎重だった。しかし「誠実、不誠実」に関わるケースは、朱書きされることになっていた。

少女たちは自分の得点を大切に思っていた。最後には追放されることになる一人の少女が、「素行が良くなければ1か月間点数がもらえない」と言われ、この扱いを不服としてディケンズに会いたいと願い出たことがあった。「彼女が言葉巧みに話をつけようと部屋に入って来たところをお見せしたかったです。彼女は点数がもらえないと、『自分の思うとおりに仕事ができない』と言うのです。『あなたが私たちの思うとおりにすれば、それで十分なのですが』。『ええ！でも』と彼女は言います。『私の点数を取り上げないでほしいわ』。『そうですね。それは当然ですね。取り戻す唯一の方法は、あなたができるだけ良い行いをするのです』と私が言いますと、彼女は『あら！すぐに点数をもらえないなら、出て行きたい』と言うのです」。そこでディケンズは、「いいでしょう、明日の朝出て行きなさい」と告げた。

ディケンズはユレーニア・コテッジをよく訪れ、若い女性たちと何度も面会した。彼女たちの様子がどのように変わっていくかを観察したが、「摂食状況については変化がなかった。そもそも彼女たちに食欲がなかったからだ」。あ

る警察裁判所判事が移住する直前の若い女に会いにきた時、彼女が一年前に知っていた女だと気がつかなかったとディケンズは1853年に書いている。ホームでは、女性たちへの面会は許されていた。親は月に1回、それ以外の人は3か月に1回である。その面会には、監督が常に同席することになっていた。収容者は「親戚や昔の先生や親切にしてくれた人たちに手紙を書くこと」ができたが、手紙は主任監督が目を通して投函した。

ホーム開設の数年後、ディケンズはミス・クーツを説得し、『家庭の言葉 (Household Words)』という週刊誌にホームについての記事を書く許可を得て、1853年4月23日土曜版（161号、2シリング）に載せた。彼はそこにホームの成功について書き留めている。アンジェラ・バーデット・クーツには問題点を報告するが、雑誌には成功例だけを書いたのは自然なことだろう。記事には個人の名前も、ホームの場所も、篤志家の名前も出さず、タイトルも「落ちた女の家 (Home for Fallen Women)」ではなく、「家なき女性のための家 (Home for Homeless Women)」として紹介している。

そこには収容者たちの一日が描かれている。彼女たちは朝6時に起き、授業に加えて、朝の祈りと聖書の時間があった。（土曜日には授業はなく、大掃除と床磨きとお風呂の日だった。）日曜日はもちろん教会に行った。

『家庭の言葉』では、収容者のプライバシーを守るために事例番号で言及されている。ディケンズは1851年12月22日の手紙に、「この数時間を費やして事例集を作っているが、それを年末までに終えたい」と書いている。従って、それぞれの収容者についての詳しいメモが取られていたようだ。おそらくこれらのメモが、雑誌に公表される事例を書くのに役立ち、事例番号と順番がメモの通りに印刷されたのだろう。

『家庭の言葉』からの抜粋（8人のケース）【省略】⁵

ホームでの入所期間は必要に応じて、とされていたが、通常は約1年だっ

た。1853年の『家庭の言葉』で、ディケンズは56人の少女が施設の収容期間を終え、30人が成功し（「2対1は励みとなる比率である」）、そのうちの7人は結婚した、と報告している。10人は素行が悪くて追い出され、3人は植民地へ向かう途中で墮落し、残りは本人の事情で去っている。概して彼女たちは品性も行いも良くなり、結婚すべく（ディケンズがそう望んでいた）オーストラリアなどへ移住した。外国に渡った女性が再び墮落したかどうかについては報告されていない。

移住

若い女性たちがユレーニア・コテッジを去った後も、ミス・クーツは彼女たちを長らく見守り続けた。彼女は、1850年に、アデレードとケープ・タウンに司教を送るための資金を提供している。ケープの総督夫妻はミス・クーツの友人で、最初に移住した何人かの女性の世話をした人物である。

少女たちが外国へ渡る時がきたら、一人ではなく、2人か3人で旅をするべきだとディケンズは思っていた。「外国で互いに助け合うことができるように、彼女たちが深い友情で結ばれていたら素晴らしいことだ」。流刑と移住を誤解されることがよくあったが、ユレーニア・コテッジの女性たちの場合は移住だった。

女性たちは三等船室で旅をした。当時は、一番良い時期であっても、船旅は不快なものだったので、もし三等船室を耐えることができれば、将来の生活を切り拓く良い準備となるだろうとディケンズは思っていた。

ディケンズは、移住の後に結婚した女性の一人が書いた手紙で、『家庭の言葉』の記事を結んでいる。

彼女は、「拝啓、私がどのように暮らしているかをお知らせするために再びお便りいたします」という言葉で書き始めている。一緒に移住した別の女性が結婚して36マイル離れたところで暮らしていることについて、また自分の夫のことや野菜を栽培している庭について記している。そして、「3匹のかわいい

豚を飼っていて、先週1匹を殺しました...」。「かわいい猫を飼っていて、これを書いている間、私の方を見えています...」。「飼っていた2羽の小鳥がいなくなりました。1羽は死んで、もう1羽は飛んで行ってしまったので、今はいません。がっかりですが、猫がいるので十分です」。手紙は、彼女に示してくれた親切への感謝と「幸せな場所」であったホームを再び訪れたいという希望で締めくくっている。

後記

ユレーニア・コテッジが1862年に閉じられるまでに、150名に及ぶ女性たちがその施設での「試み」に参加した。閉鎖された時は、ミス・クーツの出納係であったジョン・サプスフォード一家がしばらく住んでいた。その後、別の家族が何組か入れ替わって住み、1872年には「リンデン・ハウス」という名前に変えられた。そして1912年にゴーモンが映画撮影所として買い取って、「マネージャーズ・ハウス」として知られるようになった。このようにして、施設は存在を終えたのである。

チャールズ・ディケンズはこの事業を「試み」と呼んだが、それは、設立にあたっての彼の趣意表明であると同時に、当初感じていた懸念を反映したものである。

この試みが成功したかどうかをどのように見極めるべきだろうか。

150名の若い女性たちが人生の新しいスタートをする機会を与えられた。しかし、その多くはすぐに昔の生活に戻ったことがわかっている。もし、かなりの比率で彼女たちが、ミス・クーツが言ったように「救われて」いれば、確かに成功だったと言えるだろう。しかし、その試みは続かなかった。もちろん、試みが成功すればすべて継続するものだというわけではないが、この場合まだ存続の必要性があり、必要とする人々はいたにも関わらず、続けられることはなかったのである。

それは単発的な慈善の行為であり、歴史の中で小さいとはいえ画期的な出来

事であるが、それが取り組もうとしていた悪の解決策とはならなかった。

もし彼女たちにその気があれば、150人の少女たちが新たな生活を送るチャンスを与えられはした。しかし、ロンドンの通り、ヘイマーケットとピカデリー、そしてミス・クーツの家の階段には、毎夜客引きをする150人以上の女たちがいたことだろう。

訳 注

この抄訳のテキストは、Pamela Janes, *Shepherd's Bush... The Dickens Connection (The Story of Urania Cottage: Home for Fallen Women in Lime Grove, Shepherd's Bush)*, Shepherd's Bush Local History Society, 1992. である。

抄訳前半の解説で述べたように、この冊子には、バーデット・クーツの肖像画、1915年に写された元「ホーム」の建物の写真、当時の地図、ディケンズの小説『ディヴィッド・コッパーフィールド』に使われた挿絵、ディケンズ自らが編集した雑誌に匿名で載せた「家なき女の家 (Home for Homeless Women)」の記事の1ページ目のコピーが掲載されている。

ここでは、紙面に制約があるため、他の研究書で頻繁に掲載されている内容の部分と、ディケンズが書いた女性受刑者へのアピールの大部分、またディケンズの雑誌記事から著者が抜粋した部分は省いて抄訳としたこととお断りしておきたい。

また、本書に記載されたユレーニア・コテッジの教区税の記録を抄訳前半の末尾に、1861年のセンサスに載った「ホーム」の収容者名の表を本抄訳後半の末尾に付した。

- 1 さらに、ディケンズは1851年12月22日のクーツ宛ての手紙で、シャーロット・グリーンが13歳と偽っているが、ニューゲート・ストリートの貧民学校の先生の家で彼女を初めて見た時15歳と言っていたのでそれが正しい年齢に違いない、と書いている。(Edgar Johnson ed. *Letters From Charles*

Dickens to Angela Burdett-Coutts, 1841-1865., London: Jonathan Cape, 1953. 191.)

- 2 末尾の「1861年国勢調査」参照
- 3 マグダレン救護院 (Magdalen Hospital) は、1758年の創設当初「最高の介護と思いやり、親切」が示される、「矯正施設ではなく楽しく過ごせる保護施設」を目指していた。(David Owen, *English Philanthropy, 1660-1960*, Harvard UP, 1964, 58) この引用の直前で、ディケンズは、マグダレンでは1年しか収容してもらえないため、マーサ・ゴールドスミスは新しい入所者を迎えるために出所させられた、と書いている。(Johnson, *Letters* 115, 1848年1月16日付ウィリアム・ブラウン博士宛の手紙)
- 4 省略した部分の最後は、「あなたの真の友達」からの訴えであることを「信じてください」という言葉で結ばれている。これは、1847年10月28日のミス・クーツ宛の手紙に同封されていたもので (Johnson, *Letters* 98-100)、彼女の承認を経て、刑務所に服役中の女性に配布された。
- 5 この記事は、ディケンズが編集する週刊誌『家庭の言葉 (*Household Words*)』161号 (1853年4月23日) に掲載された。Michael Slater ed. *Dickens' Journalism, Vol.3, 1851-59.* に収録されているが、現在以下のURLで公開されている。

<http://www.djo.org.uk/household-words/volume-vii/page-vii.html> (Dickens Journals on Line)

抄訳で省略した部分では、ディケンズが匿名で書いた8名の少女 (27番、13番、41番、50番、58番、51番、54番、14番) の記事が掲載されている。

*1861年国勢調査によるユレーニア・コテッジの住人

ルーシー・マーチモント	主任	未亡人	48歳	「ホーム」の監督 ハンツ・チャールトン
ジェーン・マッカートニー	助手	未亡人	47歳	「ホーム」の副監督 ミドルセックス、ハックニー
クララ J バニスター	助手	未婚	27歳	家政婦 スタンフォード、ウルバーハンプトン
更生				
アニー L ロウ	収容者	未婚	19歳	女中 コーンウォール、ファルマウス
アン・モリス	収容者	未婚	19歳	女中 オクソン、ハイムア・クロス
ケイト・ラッセル	収容者	未婚	18歳	女中 ケント、グリニッジ
ファニー・バイカー	収容者	未婚	14歳	女中 ミドルセックス、ケンティッシュ・タウン
エリザ・アクハースト	収容者	未婚	19歳	女中 フランス N.B.K*
エレノア・クイーン	収容者	未婚	16歳	女中 ミドルセックス、ロンドン
アニー・ウィルデック	収容者	未婚	16歳	女中 ケント、グリニッジ
エリザベス・エベット	収容者	未婚	22歳	女中 サセックス、ケニンントン
サラ・クック	収容者	未婚	23歳	女中 サセックス、ワージング
ヘフ・ジェンキンス	収容者	未婚	19歳	女中 ケント・ダートフォード

*これは、出生地不明 (No Birth place Known) を示す。

すべての収容者は女中 (domestic servants) と書かれている。

下段は出生地

The second half of a Japanese translation of the booklet:
Shepherd's Bush. . . The Dickens Connection by Pamela Janes

Kiiko Nagaoka

Among the numerous female philanthropists in Victorian England, Angela Burdett-Coutts is famous not only for her various kinds of charity work but also for her connection with Charles Dickens. They cooperated to improve the lives of the poor, and Urania Cottage, a home for fallen women, was the project which they poured their souls into the most.

This booklet is “an expansion of a lecture given by Pamela Janes of the Shepherd's Bush Local History Society at the West London Local History Conference”, and includes important information such as the title record of property in Lime Grove from 1791 to 1821 and a list of the occupants of Urania Cottage taken from the 1861 census. Until now several biographies of Burdett-Coutts and innumerable biographies of Charles Dickens have been published, and the novelist's involvement with Urania Cottage has already been much discussed. The present leaflet will contribute to furthering Dickens' studies, both as a unique and compact guide to the local history surrounding the House and as a research work on the Dickens' view on people in desperate need.